



## 「江戸期のパイオニア

くらくまつ えもん  
工楽松右衛門」

加古川北高校の校歌2番に「流れ豊けき加古川の 永遠の姿に学びつ  
つ・・・」とあります。加古川周辺の地域は大なり小なり加古川の恩恵に与  
っています。加古川の企業「日本毛織」の加古川工場（現在、加古川市民病  
院が建設中）や印南工場の建設地が検討された時、加古川の水が大きな要因  
となったといわれています。

さて、最近、帆布の商品が人気を博しています。鞆やペンケース、小物入れなど、さま  
ざまな用途のものが店頭に並んでいるのを多くみかけるようになりました。倉敷帆布、尾  
道帆布、そして松右衛門布など各地でさまざまな帆布名を目にします。そのもとをつくっ  
たのが右の写真（高砂神社内に銅像あり）の  
工楽松右衛門です。うすい木綿布を2枚ほど張り

合わせた破れやすかった帆布（刺帆）を最初から太  
い糸を使った厚手の製品（織り帆）を生み出しまし  
た。



その工楽松右衛門に関連する記事が、2月  
1日付け神戸新聞朝刊に「江戸期の発明家工楽松右衛門ゆかりの旧宅を高砂  
市指定文化財に」という文字が躍っていました。この旧宅に残されている資  
料は、約8千点にのぼるといわれています。築200年以上といわれ、江戸  
時代の木造船で使用した船板を再利用されています。版画家の棟方志行や俳  
人永田耕衣、映画評論家の淀川長治が訪れるほどの文化サロンでした。

工楽松右衛門は、帆布の発明だけではなく、幕府や諸藩の命で、北方領土の択  
捉島や函館、鞆の浦（広島県福山市）などで港を築き、地元の加古川の改修や高砂  
港改築にも携わりました。幕府から工夫を楽しむの意の「工楽」の姓を与えられました。  
司馬遼太郎の小説『菜の花の沖』では船乗りの心意気を高田屋嘉兵衛に伝える役  
割を演じています。

今回高砂市で史跡として指定された旧宅は、以前から注目されていたもので、この  
指定を機に工楽松右衛門研究が進むことが期待されています。